



全農教

日本帰化植物友の会通信



NO.6 [2008年9月27日 発行]

ヤワゲフウロとマルバフウロ (新称) について

植村修二・榎本 敬・加藤美代子・小 嶋 裕 子・水 田 光 雄

● はじめに

筆者の1人(植村)は2003年に出版された平凡社の「日本の帰化植物」のカラーページPL.55にヤワゲフウロとして掲載された写真の植物に疑問を感じた。早速、撮影に関わった筆者の1人(小嶋)に連絡をとり、送付された生品より採種し、筆者の1人(植村)が大阪府箕面市にて3年間栽培し観察を続けた、その結果、欧州原産の新帰化植物、*Geranium rotundifolium* L.であることが明らかとなったので報告する。本種の和名は種小名*rotundifolium*に従ってマルバフウロ(新称)とする。

なお、同ページに載せられているチゴフウロ*G. pusillum* L.のカラー写真が本物のヤワゲフウロ*G. molle* L.と思われる。

● ヤワゲフウロとマルバフウロについて

それでは、まずヤワゲフウロについて触れておく。ヤワゲフウロは欧州原産で、わが国では北海道室蘭市で初めて記録され(村田, 1977)、その後、大阪府、和歌山県、香川県など近畿、四国地方で次々と確認されている。大阪府では、堺市の南部、富田林市、岸和田市などのミカン園中心に多く見られる。また、香川県の生育地、善通寺市大麻山(標高616m)の中腹でもミカン園周辺から広がったと考えられている。ここでは、通常ピンク色花のヤワゲフウロに加え、2002年4月19日には白花品が筆者の1人(加藤)によって発見されている。この白花品は筆者ら(加藤、植村)が栽培した結果、遺伝的に固定しているのでシロバナヤワゲフウロと新称する。

ミカン園に生育するヤワゲフウロは有機質肥料として投入された羊毛くず(ロックス)を原料にした堆肥に由来すると筆者の1人(植村)は考えている。ヤワゲフウロによく随伴して見られる帰化植物として、モンツキウマゴヤシ*Medicago arabica* (L.) Huds.をあげることができる。モンツキウマゴヤシの帰化に関連して、愛知県

北部～岐阜県南部の毛織物生産に伴う羊毛くずの利用として羊毛堆肥が1965年から生産され、おもにカキ園やイチゴ栽培畑に利用されていたとの記述がある(藤本ら1999)。おそらく大阪府下のヤワゲフウロもこの種の有機質肥料に混ざってきたものではないかと思われる。

一方、当初ヤワゲフウロと誤認されていたマルバフウロ(新称)は、筆者の1人(榎本)によって、2000年4月14日、岡山県岡山市津島中、岡山大学文学部構内で初めて見つげられた。後日周辺を探した結果、薬学部の薬草園に同じ種が栽培されていることがわかり、ここに栽培されていたものが逃げだした可能性が高い。2006年現在でも生育している。岡山県以外では、筆者の1人(水田)が2004年5月22日、兵庫県神戸市ポートアイランド、港湾地区の道路中央分離帯でマルバフウロを採集している。



▲ シロバナヤワゲフウロ

● フウロソウ属を同定するには

わが国に現在帰化しているフウロソウ属を正しく同定するには完熟した分果や種子を見ることが重要である。ヤワゲフウロは、花が咲き始めたロゼット型草姿を残している時期におし葉にすると標本はきれいに出来上がります。美しく仕上げたいという気持ちは分かるが、これでは類似したチゴフウロやマルバフウロと誤って同定してしまうかもしれない。ちなみに、平凡社の「日本の帰化植物」で問題にしたマルバフウロの写真もこの状態で撮影されたものである。確実に熟した分果が確認できる状態まで待つと草姿はだらしなく間延びした感じとなるが、この時期をねらって標本を作成する必要があ

る。理想を言えば、飛び散ったタネ（ヤワゲフウロ・チゴフウロの場合は分果ごと散布されるので分果となる）を集め、それらを硫酸紙に包んで標本に貼っておくのがベストで、こうすればヤワゲフウロ・チゴフウロ・マルバフウロの3種は間違いなく区別できる。

ヤワゲフウロ → 分果はほとんど無毛で、その表面には横しわがある。種子表面は平滑。分果散布型。

チゴフウロ → 分果は毛で覆われる。種子表面は平滑。分果散布型。

マルバフウロ → 分果は毛で覆われる。種子表面に網目模様がある。種子散布型。

(写真は帰化植物写真ニュース No. 6 に掲載)

主な参考文献

- 藤本ら 1999: マメ科植物における地域集団の生活史・窒素固定能の変異と遺伝的分化, 平成7年度~平成9年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書.
水田光雄 2004: [naturplant: 1845] マルバフウロの帰化報告.
村田 源 1977: 新帰化植物ヤワゲフウロ(新称), 植物分類地理 38(1-3):83.
清水ら 2003: 日本の帰化植物, 平凡社.
植村修二 1989: 大阪府に帰化したヤワゲフウロ, 近畿植物同好会会誌 13:21-24.
植村修二 2003: [naturplant: 1150] 新帰化植物マルバフウロ.
Yeo, P. F 1985: Hardy Geraniums, Timber Press.

(訂正とお詫び)

2005年10月23日発行の帰化植物写真ニュース No. 4 のシラホシムグラについて

2007年8月, 上田泰二郎氏より, 「シラホシムグラは, 千石谷林道の整備又は改良などで, 進入した車両が持ち込んだものと思います。かなり奥の方ですが, 途中には無く, ヤエムグラばかりです。」との連絡がございました。

つきましては, 帰化植物写真ニュース No. 4 の本文最後の「岩涌山のものは在来の別種の誤認かもしれない。」を削除いたします。

また, 帰化植物写真ニュース No. 5 の中で, 筆者の1人(植村)は本種の発見者2名とともに, 「日本に帰化したアワユキヒルガオ」として報告いたしました, 下記文献にフウリンユキアサガオの先行名があるのご指摘がございました。

つきましては, アワユキヒルガオの和名を別名扱いにするとともに, 本種の帰化記録を以下の様に訂正させていただきます。

日本新記録: 宮崎県宮崎市浮田下城(1999年11月10日, 荒木徳蔵氏採集)

岡山県を我が国第2, 群馬県を第3の産地と訂正いたします。

参考文献 荒木徳蔵 2001: 宮崎県の帰化植物目録(2), 宮崎県総合博物館研究紀要 22:153-161.

帰化植物・セイヨウウツボグサについて

廣田伸七

(「植調」第41巻4号より転載)

ウツボグサは日当たりのよい原野や道ばた, 林縁などに生育し, 茎は直立して高さ25~30cm, 普通は分枝しないが, 基部で数本に分枝することもある。初夏に茎先に長さ3~8cmの円柱状の花穂をつけ, 紫色の唇形花を密につける。夏に花が終わると葉が褐色に変わって枯れることから夏枯草(カゴソウ)という呼び名もある。昔

から消炎性利尿薬, 口内炎, 扁桃炎などの生薬として利用された。

このウツボグサの亜種のセイヨウウツボグサが最近各地に野生化して帰化植物となっているが, このセイヨウウツボグサの写真や形態について記載されたものは少ないので今回はこれを掲載した。

● セイヨウウツボグサ〔シソ科〕多年草

Prunella vulgaris L. subsp. *vulgaris*

ヨーロッパ、北アフリカ、西アジア、インド、ネパール、ブータン、中国、朝鮮などに広く分布し、オーストラリア、ブラジル、アメリカに帰化している（神奈川県植物誌 2001 より）多年草。根茎を出して新しい株をつくる。茎は根元でよく分枝して横に広がり径 40 cm 内外の大きな株になる。茎は四角柱状で稜があり、中実、上向きの白毛があり、長さは 18~24 cm、基部はときに紫褐色を帯びる。葉は対生し葉腋から枝を出す。葉身は卵状楕円形~卵形、長さ 2~4 cm、幅 1.5~2.5 cm。両面に白毛があり、縁はやや波形。葉柄は長さ 1.0~2.2 cm、白色の毛がやや密にある。初夏に茎先に長さ 1~2 cm、径 1 cm 内外の花穂を出し、紫~白色の唇形花をつける。従来のウツボグサの茎は直立するが、セイヨウウツボグサの多くは茎の下部は横に這って広がり先が立つ。渡来し



▲ セイヨウウツボグサ、生育初期

たのは花壇に適したハーブとしてセルフヒールの名で園芸店などで売られたものが逸出したものといわれる。（注：カラー写真は帰化植物写真ニュース No. 6 に掲載）

帰化植物・ミクリガヤツリについて

廣田伸七

〔植調〕第 41 巻 6 号より転載

上記で写真入りで掲載されたものがあまりない帰化植物として、写真をつけて「セイヨウウツボグサ」を紹介したが、セイヨウウツボグサと同じように写真入りで掲載されたものが少ない「ミクリガヤツリ」を紹介する。

ミクリガヤツリは 1972 年、徳島県川島町を流れる吉野川の堤防で阿倍近一氏が採集されたという記録があり（採集ニュース 77: 50）、栃木県、東京都、徳島県、福岡県からも採集の報告がある。

ミクリガヤツリの特徴は、茎の頂に 3~4 枚の苞葉を



▲ ミクリガヤツリの花穂

着けその中心から 3~6 本の花序の枝を放射状に広げて、その先端に球形の頭状花序を着けることである。この頭状花序の形はヒメクグの花序と似ているが、ヒメクグよりも大きく、また、ヒメクグは茎の頂に 1 個しか着けられないが、ミクリガヤツリは数本の枝を出してその各々の枝先に 1 個ずつ着けるといふ特徴がある。

● ミクリガヤツリ〔カヤツリグサ科〕

Cyperus echinatus A. W. Wood

北アメリカ原産の多年生。草地や土手、荒地などに生育する。茎は数本そう生し、高さは 35~80 cm、3 稜形で平滑、無毛、緑色だが基部は赤紫色を帯びる。葉は茎より低く長さ 30~65 cm、幅 3~6 mm、基部は茎を包み、葉の縁はざらつく。5~7 月に茎の先に葉状の苞葉を 3~4 個出し、このうち 1 個が長く長さ 28~33 cm、幅 5~7 mm で残りの苞葉は短く、苞葉の縁もざらつく。苞葉の中心から長さ 1.5~5 cm の長短不同の円柱状の枝を通常 3~6 本（ときに 8 本）を放射状に広げて、枝の基部中心に 1~2 個、各枝先に 1 個、多数の小穂が密に集まって直径 1 cm 内外の球形の花序を着ける。花序ははじめ緑色で熟すと褐色になる。小穂は線形で長さ 4~6 mm。瘦果は 3 稜があり長さ 2~2.5 mm。

（注：カラー写真は帰化植物写真ニュース No. 6 に掲載）

● お知らせ

日本帰化植物写真図鑑の 304 頁のコテングクワガタの写真が間違っていました。訂正してお詫びいたします。つきましては訂正シールを同封しましたので訂正して下さい。もし足りない方は連絡いただければ送ります。

（注）インターネットで既にお申込みいただきお送りした方には入れてありませんのでご了承下さい。

● 続, 日本帰化植物写真図鑑の写真募集のお知らせ

日本帰化植物写真図鑑を2001年7月に発行してから8年が過ぎました。この間版を重ね、2008年6月に第5刷を発行しました。この間にも新しい帰化植物が侵入してきております。

全農教では2009年末までに続篇として仮称「日本帰化植物写真図鑑その2」として、「日本帰化植物写真図鑑」(現在発行のもの)に記載されていない帰化植物を収録して帰化植物に関する情報をより完全なものにする目的で刊行する企画をたてております。

つきましては、新しい帰化植物の写真をお持ちの皆様方からご協力をいただいでできるだけ多くの種を収録したいと思いますので、写真をお持ちの方は是非お貸し下さりたく、ここにお願い申し上げます。下記の一覧表は、前回の帰化植物写真図鑑に掲載していない種です。勿論この表以外にも掲載していない種が多くあると思われるかもしれませんが、それらの種の写真をお持ちの場合はその種もお貸し下さいますようお願いいたします。写真はカラーのポジ(スライド)、紙ヤキ、データなんでも結構です。

お貸しいただける写真をお持ちの方は、まず植物名を葉書、FAX、メールなどで下記宛にご一報下さい。種類名が集まったところで編集委員会で掲載種を決定し、掲載が決定しましたら改めて依頼状を正式にお送りいたしますので、それから現物を送って下さい。正式に採用が決まったものについては些少で恐縮ですがお礼を差し上げます。また、情報をお寄せいただいた方には記念品を差し上げます。

なお、情報はいつでも結構ですが、編集の都合上11月末までにお寄せいただければ幸いです。

多数のご連絡をお待ちしております。

● 情報の送り先

〒110-0016 東京都台東区台東 1-26-6
 全国農村教育協会 帰化植物写真担当
 電話 03-3833-1821
 FAX 03-3833-1665
 Eメール hon@zennokyo.co.jp

● 写真募集帰化植物一覧表

[イラクサ科] セイヨウイラクサ
 ヒメイラクサ
 カベイラクサ
 [タデ科] ホザキニワヤナギ
 カギミギシギシ
 ヒュウタンギシギシ
 [ツルムラサキ科] ツルムラサキ
 [ナデシコ科] ヌカイトナデシコ
 カッコウセンノウ
 アメリカセンノウ

[アカザ科]

ムシトリマンテマ
 コムギセンノウ
 フタマタマンテマ
 (ホザキマンテマ)
 アケボノセンノウ
 ツキマンテマ
 ヒメシラタマ
 シラタマソウ
 アメリカアリタソウ
 ヒロハヒメハマアカザ
 ヒメハマアカザ
 ハリヒジキ
 ノハラヒジキ
 ホシサンゴ
 カブダチアッケシソウ

[ヒユ科]

ヒメアオゲイトウ
 ハイビユ

[キンポウゲ科]

セイヨウキンポウゲ
 イトキツネノボタン

[オトギリソウ科]

オオカナダオトギリ

[ケシ科]

カラクサケマン

[アブラナ科]

シロイヌナズナ
 ウスユキナズナ
 アマナズナ
 ヒメナズナ
 ヒメアマナズナ
 ヒメクジラグサ
 ロボウカラシ
 キバナズシロモドキ
 キバナズシロ
 ダイコンモドキ
 (アレチガラシ)
 コゴメイヌガラシ
 ミミイヌガラシ
 セイヨウノダイコン
 ハタザオガラシ
 ノハラガラシ

[モクセイソウ科]

キバナモクセイソウ
 ホザキモクセイソウ

[ベンケイソウ科]

ウスユキマンネングサ
 ヨーロッパタイトゴメ

[バラ科]

ノミノハゴロモグサ
 ハイキジムシロ
 オランダワレモコウ
 タチロウゲ

[マメ科]

イシカリキイチゴ
 クマノアシツメクサ
 アメリカホドイモ

	サンヘンブ	[ゴマノハグサ科]	ムラサキウンラン
	ヤナギバレンリソウ		キバナウンラン
	キバナレンリソウ		ヒメアメリカアゼナ
	トゲミノウマゴヤシ		モウズイカ
	キレハウマゴヤシ		カラフトヒヨクソウ
	テマリツメクサ	[キキョウ科]	ロベリアソウ
	フウセンツメクサ	[キク科]	イトバギク
	ジモグリツメクサ		スイゼンジナ
	イブキエンドウ		タケダグサ
	ヒナカラスノエンドウ		マツバサワギク
	ハリエニシダ		オオホウキギク
	キバナカラスノエンドウ		クガギク
[フウロソウ科]	ミツバオランダフウロ		セイタカヨモギ
	ナガミオランダフウロ		シマトキンソウ
	ヤワゲフウロ		メリケントキンソウ
	ビレネーフウロ		ナツシロギク
	オトメフウロ		ワタゲツルハナグルマ
	チゴフウロ		アレチベニバナ
[トウダイグサ科]	コバノニシキソウ		イガヤグルマギク
[ヒメハギ科]	ハリヒメハギ		ヒレハリギク
[ツリフネソウ科]	オニツリフネソウ		ゴロツキアザミ
	ハナツリフネソウ		ヤネタビラコ
[アオイ科]	ヤノネボンテンカ		ヒメブタナ
[ウリ科]	オオスズメウリ		ハリゲコウゾリナ
[スミレ科]	アメリカスミレサイシン		ナタネタビラコ
[ミソハギ科]	アメリカキカシグサ		タイワンハチジョウナ
[アカバナ科]	コバナヤマモモソウ	[イネ科]	アレチイネガヤ
	アメリカミズユキノシタ		コイチゴツナギ
	ミナトマツヨイグサ		イヌナギナタガヤ
	ヒナマツヨイグサ		ハリノホ
	オニマツヨイ		スズメナギナタガヤ
[セリ科]	ツキヌケサイコ		ナンカイヌカボ
	タマヤブジラミ		ノスズメノテッポウ
	ドクゼリモドキ		ヌカススキ
[アカネ科]	メリケンムグラ		セイヨウヌカボ
[ヒルガオ科]	ハリアサガオ		ホソセイヨウヌカボ
	カロライナアオイゴケ		ミナトカラスムギ
	オキナアサガオ		オニカラスムギ
[ムラサキ科]	ワルタビラコ		ヒナカナリークサヨシ
	アラゲムラサキ		セトガヤモドキ
	シベナガムラサキ		ヤクナガイヌムギ
	ハマワスレナグサ		クサビガヤ
	ヒメムラサキ		ムクゲチャヒキ
[クマツヅラ科]	ミナトクマツヅラ		マドリードチャヒキ
[アワゴケ科]	アメリカアワゴケ		アレチチャヒキ
[シソ科]	コゴメオトギリソウ		ヤギムギ
	ニガハツカ		ヤバネオオムギ
[ナス科]	ウスゲホオズキ		ヒメムギクサ
	フウリンホオズキ		セイヨウヤマカモジ
	キバナホオズキ		アメリカノキビ
	ヒラナス		シマヒゲシバ
	ラシャナス		シンクリノイガ

コヒメビエ
 ニコゲヌカキビ
 ホウキヌカキビ
 エダウチチカラシバ
 ザラツキエノユロ
 イヌシバ
 ヒメオニササガヤ
 チャボウシノシッパイ
 モウコガマ
 ヒナウキクサ
 イボウキクサ
 ミジンコウキクサ

[ガマ科]
 [ウキクサ科]

[カヤツリグサ科] クシロヤガミスゲ
 アメリカヤガミスゲ
 ヒレヤガミスゲ
 アメリカミコシガヤ
 ナガバアメリカミコシガヤ
 サヤシロスゲ
 コガネカヤツリ
 ヒメムツオレガヤツリ
 セフリアブラガヤ
 ヒメクロアブラガヤ

以上ですが、これ以外でもお持ちの方は是非ご協力の程をお願い申し上げます。

待望のイネ科図鑑が発刊

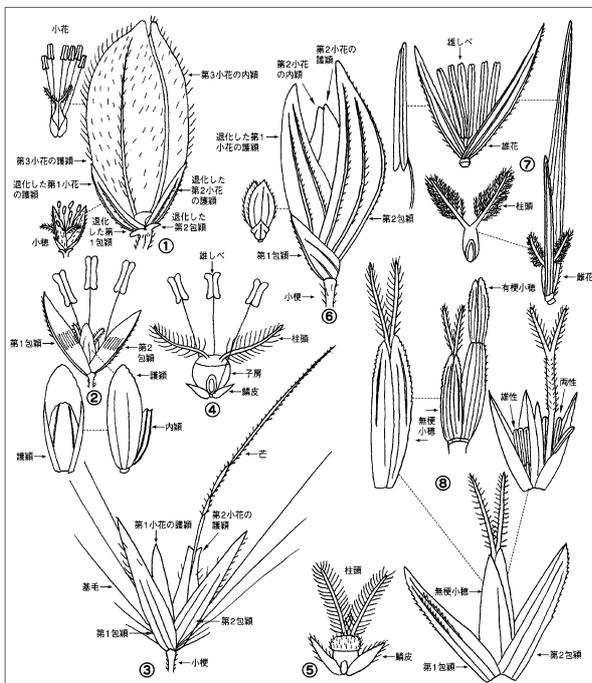
桑原義晴日本イネ科植物図譜

イネ科植物は、人類の食糧資源をはじめ、家畜の飼料、庭園・公園の芝ふ、道路・堤防の補強用などとして多く利用され、人間との関係はきわめて深い。その上、熱帯から温帯にかけて広く分布し、種類も量も非常に豊富で、いたる所に見られる草本性の植物である。

しかし、どれもこれも同じような特徴をもっていて、しかも全体の形や花穂も同じように見えて識別が極めて困難な植物の一群である。

従ってイネ科植物はとかく敬遠されがちであるが、判

別のポイントが分かると面白い植物群である。同封した内容見本の「桑原義晴日本イネ科植物図譜」を見ていただければ納得いくと思うが、イネ科植物の判別のポイントは小穂を構成するいろいろな形の包葉（包穎、護穎、内穎など）であるが、この図鑑では属ごとに数種を並べて比較した判別のための比較図をふんだんに使ったところに特色がある。例えば右下の図はキンエノコロ、ムラサキエノコロ、エノコログサ、アキノエノコログサの茎と花穂、小穂、葉舌、幼苗を比較したもの。左下の図はイネ科の各部位の用語を解説したものである。このように難しいといわれていたイネ科も拡大図で解説すると面白くなりイネ科もよく分かる図鑑である。

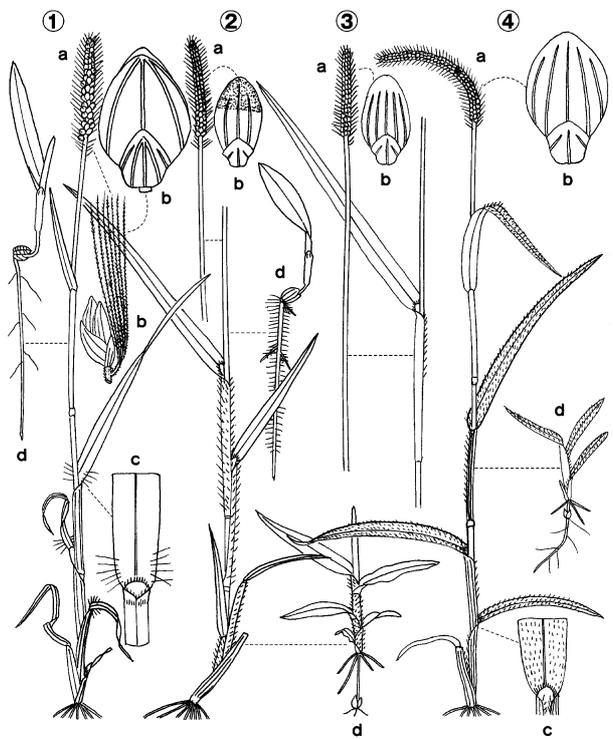


イネ科植物の小穂と小花の形態

小穂はイネ科植物に普通に見られる花序で、複花序の最終の枝の穂状花序をさす。小穂をつけている花序の枝を小穂といふ。1個の小穂は2枚の包穎と、いくつかの小花及び小花をつないでいる軸（小軸）からなっている。小花は種によって、1個の小穂にひとつしか含まれていないものから数個から多いものでは30前後も含まれているものもある。1個の小花は通常護穎、内穎各1枚、2枚の鱗皮、3本の雄しべ、1個の雌しべをもっている。

1. イネ (348)：小穂は3小花。包穎及び第1～第2小花は極端に退化し、第3小花だけが完全。第1、第2包穎は退化包穎。第1、第2小花の護穎は退化した護穎。2. コヌカグサ (44)：小穂は1小花。3. ススキ (325)：小穂は2小花。第1小花は退化して（不完全）護穎だけとなる。第2小花は完全に護穎の先に芒があり、内穎は微小。4. ヒロハノウシノケグサ (238)：小穂は多小花。5. テンクグサ (211)：小穂は3～5小花。6. ヒメタイヌビエ (200)：小穂は2小花。第1小花は不完全、第2小花は完全。7. マコモ (478)：小穂は単生。3小花。包穎及び退化護穎は消失。第3小花は完全。8. アイアシ (373)：無梗小穂は2小花、1個は雌性、他は両性。有梗小穂は退化。

※和名の後の()内数字は図版の頁を示す。



エノコログサ属 (1) [イネ科]

2. ムラサキエノコロ *S. viridis* var. *purpurascens* 葉は紫色。無毛。葉鞘は紫かっ色。有毛。小穂は長さ2mm。芒は紫色。(p.450)

3. エノコログサ *S. viridis* 葉は無毛。小穂は長さ2mm。芒は黄緑色。(p.444)

4. アキノエノコログサ *S. faberi* 葉の表面有毛。小穂は長さ2.8～3mm。芒は黄緑色。(p.437)

1. キンエノコロ *S. glauca* 葉は基部にだけ長毛がある。小穂は長さ3～3.5mm。芒は黄白色。(p.439)

a.茎と花穂 b.小穂 c.葉舌 d.幼苗

カヤツリグサ科 入門図鑑

谷城勝弘／著

定価 2,800 円＋税 A5 判変形 256 頁



識別困難といわれるカヤツリグサ科植物。その識別ポイントをやさしく解説した、画期的な図鑑。入門者にも使いやすい内容です。

(本書の構成)

第1部 カヤツリグサ科の形／第2部 カヤツリグサ科 200 種／第3部 カヤツリグサ科の生える環境／第4部 標本でみるカヤツリグサ科

書評から (抜粋)

人には「好きなんだけど、どうも苦手」「興味はあるんだが、近寄りがたい」というものが少なからずあるようだ。(中略) 植物では、イネ科とカヤツリグサ科がそれに当てはまるだろう。種類が多く、形がどれもよく似ていて、見分けに役立つような花など明確な情報が少ない。

だが、世の中には実直で優しい人がいるものだ。日本には約 600 種存在するというカヤツリグサ科の植物のうち、200 種を集めて『カヤツリグサ科入門図鑑』を作ってくれたのだ。そして、ここからが大事なことなのだが

「この科の植物の判別の決め手となる識別形質は限られており、その形質は種ごとに比較的安定して変異の少ないものであるから、慣れれば誰にでも容易に種類の検討がつけられる」と勇気づけてくれている。これが嬉しい。

では、その識別に役立つ形質は何かというと、葉の形や花序の様子ではなく、雌花(後には果実となる)を包む果胞とよばれるものや、雄花や雌花に付属している鱗片や、果実そのものの形なのだという。

現金なもので、このように順序だてて丁寧に説明を受けることができると、何も味気なかったカヤツリグサ類の顔が急に親しげに見えてくる。

(BE-PAL 2007 年 8 月号掲載 文・三宅直人)

まず、手にとって驚いたのは写真が鮮明で、小さくて虫めがね(ルーペ)で見てもよく分からない小穂(しょうすい)を拡大写真で載せ、分類の決め手を矢印で示してある。

著者の言葉を借りれば、初心者でも使いこなせる一目瞭然の写真図鑑だ。レンズを何枚も組み合わせると、著者が工夫し撮影した写真で、しかも生の植物からとったものだから、実際と少しも変わらない。カヤツリグサを右手に、この図鑑を参照すれば植物の名が分かるようにした著者の心配りが随所にうかがえる。ハンディーな図鑑だから持ちやすく、重さも手ごろで、表紙も雨に濡れても大丈夫なようになっている。

(千葉日報 2007 年 4 月 16 日掲載 文・川名興)

シダ植物

村田威夫・谷城勝弘／著

定価 1,905 円＋税 A5 判 136 頁



花が咲かないためわかりにくい植物と思われていたシダ植物。その形と生態をわかりやすく写真を交えながら解説しました。図鑑編ではワラビ、ゼンマイ、スギナをはじめとして、身近にみられる 90 種を紹介。入門に最適な図鑑です。

(本書の構成)

第1部 シダの「くらし」と「かたち」／第2部 身近なシダ 90 種／第3部 シダを調べる

書評から (抜粋)

シダ類は、素人なりに本気で取り組もうとすると想像以上に手強い。そこで形に特徴のあるものからでも覚えようかということになるのだが、それではいつまでたっても身近な種の区別がつくようにならない。かといって、体系的に取り組もうとすると、用語なども含めてなかなか敷居が高いのだ。

そうした中で、あるシダ観察会に参加したら、目からウロコが落ちた。「やはり身近なものから始めるといいですよ。それには場所が重要」と言われたのだ。(中略)

本を開くとまず校庭、学校周辺、都市の公園、日本庭園、崖地といった場所で見られる主だったシダが列挙されている。これがいい。なぜか?

これによってどの種から覚えていったらいいかが何となくわかってくるからだ。たとえば学校周辺なら古い石垣に生えるイノモトソウ、溝の上のミゾシダ、都市の公園ならツツジの植え込みの間などに見られるベニシダ、遊歩道沿いのオニヤブソテツといった具合に。

考えてみると、虫にしる魚にしる子供の時から親しんできたものには、知らず知らずのうちに自分の中に身近度ランキングができていく。(中略) 先の観察会や本書は、場所を限定することで種を絞り、さらにその場所によく見られるものを選び出すことで、私たちの中に身近度ランキングを形作ってくれる。これにより次のステップに自信をもって進めるようになるのだ。

そして、本書のもうひとつの特徴は、全 136 頁のうち前半の 46 頁、後半の 36 頁(全体の約半分以上!)がシダの見方にあてられていることだろう。後半は雑種の話などでやや高度だが、前半部では先に述べた生育場所の話のほか、進化や分類、生活史、繁殖、形態など基礎的な話をたくさんの写真を使って丁寧に解説。生物の教科書にも、これくらいの解説がついていれば興味を持つ人が増えるだろうと思わせるほどだ。

(BE-PAL 2006 年 10 月号掲載 文・三宅直人)

花からたねへ

— 種子散布を科学する —

小林正明／著

定価 2,500 円＋税 A5 判 248 頁



種子散布のいろいろだけではなく、「花」のどの部分が、どのように変化して、種子散布器官になったのかを模式図で明らかにしつつ、花から果実、果実から種子までを写真を使って解き明かします。

著者は長野県の高校の元校長。長年にわたる植物観察を通して、動けないはずの植物が様々な工夫の末、花のあらゆる器官を使って種子散布している姿に感動して、研究をしてきました。その成果を集成しました。

(本書の構成)

I 花から果実、種子へ／II 種子散布のさまざまな方法／付章 果実や種子をつくらぬ植物

書評から (抜粋)

一番の特徴は目次の後にある「もうひとつの目次」。見開きの下半分にコンパクトにまとめられたこの「目次」

に、著者の伝えたいことが凝縮されている。移動できない植物は、風や動物、水の力を借りるなどして、種子を遠くに運ぼうと苦心する。そのために、花器官のさまざまな部位を特殊な形に変えている。どの部位を変えて、どの散布方法を採用したのかの一覧表が「もうひとつの目次」だ。ふんだんに使われる本文の写真も「もうひとつの目次」と照らし合わせながら眺めれば、また違って見えるだろう。著者が「(植物は) 受身の生活ではなく、積極的に力強く生き抜いている」というのがわかるはずだ。(日経サイエンス 2007 年 6 月号掲載)

「うわっ、スゴイ」「えっ、そうなの?」1,000 点以上の美しい写真で色々な種の形や果実の断面等を見ると、とにかく圧巻! 種を投げ、風でばらまき、動物に運ばせ、水に流す。あらゆる知恵が総動員された散布方法や、花のどの部分が種子散布器官になるかも紹介され、見応え・読み応えのある一冊。

(自然保護 SHOP 狼森 2007 年春夏号掲載)

植物の種子が飛散する仕組みを写真で解説する本。風によって遠くまでいくタンポポ。鞘(さや)が乾燥してはじめて飛ばすフジなど、植物の生態の神秘が実感できる。(サライ 2007 年 10 号掲載)

きのこ博士入門

根田 仁／著 伊沢正名／写真

定価 1,700 円＋税 A5 判 170 頁



きのこの生態を中心に、自然界でどんな役割を果たしているのかを紹介しています。丁寧な解説と、美しく忠実な写真できのこがどんな生き物かがよくわかり、菌であるがゆえの不思議さと魅力のとりこになります。観察方法(標本、観察ノートの作り方、顕微鏡、きのこ写真の撮り方)についても詳しく紹介しています。

(本書の構成)

きのこを探す／きのこはどんな生物なのだろう／きのこの生活／きのこ博士をめざして

書評から (抜粋)

「自然の中でのきのこの役割を表現したかったのですが、そのような機会はなかなか巡ってきません。この企画が舞い込んできた時は、天にも昇るような気持ちでした。」(伊沢氏のあとがきより) 本書は伊沢氏の長年の想いを結実させたといえる著書だ。

キノコは食毒の視点ばかりが多く語られ、生態や自然界における役割については従来の図鑑類などで十分に紹

介されてきたとは言いがたい。本書はその盲点をつき自然の中のキノコを真摯に徹底解説している。食毒についてあえて記さず、純粹に自然を知るための姿勢に徹している。無葉緑植物とキノコの共生、果実に擬態する有袋菌、地衣化するキノコなど、じつに興味深い生態を含む本格的内容でありながら子供向きのわかりやすい解説が秀逸である。自然に関心のある全ての人にお勧めしたい良書だ。(faura 13 号掲載)

普通の図鑑でもなく、普通の解説本でもない。何気なく伊沢さんの美麗写真をたどっていくことによって、きのこの暮らしぶり・きのこの不思議、などを自然と学ぶことができる構成になっている。また、そのための「しかけ」が様々なこらされている。

第1部「きのこを探す」、第2部「きのこはどんな生物なのだろう」もよくできているのだが、第3部「きのこの生活」には従来の写真図鑑には、とりあげられなかったような記述と写真が満載。例えば「孔腐れ」、「薄腐れ」、「心腐れ」をご存じか。この本には写真つきの解説が掲載されている。「地衣化するきのこ」という項目の写真も綺麗というレベルを超えた良い写真である。きのこの暮らしぶりを紹介する各項目のたてかたも新機軸でよい。(中略) きのこ入門書としても、またクロウトさんが読んで、十分価値のある本です。楽しんでください。

(きのこアドバイザー 10 号掲載 文・吹春俊光)

せいかけい
植物の生活型の話

— 雑草のくらし

・ 野外観察入門 —

岩瀬 徹／著

定価 1,500 円＋税 A5 判 120 頁



「生活型」とは植物の形やくらしぶりを類型化したもの。生活型の視点でみた雑草のくらし、野外観察のヒント、植物生態図鑑の読み解き方をを解説しました。

(本書の構成)

1 章 植物の生活型とは何だろう／2 章 生活型のいろいろ／3 章 植物生態図に示された生活型／4 章 生活型から見た雑草のくらし

書評から (抜粋)

「生活型」とは、一般になじみが薄いですが、岩瀬氏の新書は身近な植物を例にしながら、人々に分かりやすい植物観察入門となっている。類書がほとんど見られないから植物愛好家はもちろん、読者にとっても必見の書物だ。(中略)

自然観察大学で学長を務める岩瀬氏はこの本の主旨を生かして指導も怠りない。例えばクマノミズキの木でいうと、枝の伸び方を説明した後、葉のつき方や芽の様子を観察指導する。世の観察会ではえてして“この木は何

ですか”ときかれると“クマノミズキです”。これで指導者と会員の会話は終了。名前を知ればそれでおしまい。これでは木をよく観察しない。まして芽が鱗芽なのか裸芽なのか、葉は対生なのか互生なのか、木のくらしや形を見ないままクマノミズキの名前を知るだけになる。観察をもっと深めるための目線をこの本によって知ることができよう。

(千葉日報 2007 年 1 月 22 日掲載 文・川名興)

題名はチョイ難に聞こえるが、本書は平たくいえば「植物を見るとき、その生活ぶりに注目するとおもしろいよ」という本だ。

たとえばよくご存知のナズナ(アブラナ科)やオオアレチノギク(キク科)、メマツヨイグサ(アカバナ科)は類縁関係は遠いが、いずれも冬越しをするとき地面にへばりつき放射状に葉を出すロゼットという形をとる。そこで逆にロゼットになる植物だけをながめてみると、それらが日当たりのよい場所、人間に踏みつけられる場所などに多く見られることがわかる。つまり生活型からおおよその環境が推定できたりするからだ。(中略)

そこには人間の勝手な分類などどこ吹く風で、したかに生きる植物の姿が浮かび上がる。一見物静かな雑草が、自分だけの生き方にこだわる個性派だということが実感としてわかるのだ。一歩進んだ植物観察をしたい人にぜひお薦めしたい。

(BE-PAL 2007 年 2 月号掲載 文・三宅直人)

浅野貞夫日本植物生態図鑑

浅野貞夫／著

定価 13,000 円＋税 A4 判 636 頁(カラー 36 頁)

(本会会員には税込み 12,000 円)

植物の一生の姿を記録した、世界にも類をみない「生態図鑑」。著者浅野貞夫は、植物の一生を追跡しながら克明な生態図を描き 40 有余年をかけて 555 種類の植物生態図を完成させました。植物の全形から地下部、芽ばえ、花、果実、休眠芽までを描写。特に地下部の精密さは圧巻です。植物の生育、繁殖、休眠などで生活様式を類型化した「生活型」を全パターン表現しています。巻末に全掲載種のカラー写真を掲載しました。

書評から (抜粋)

世に植物図鑑はあるが、発芽から種子が落ちるまで、植物の一生の姿を記録した「生態図鑑」はみあたらない。そんな図鑑がたった一人の高校教師が 40 年以上の歳月をかけて残した 555 種類のスケッチ画をもとに完成した。(中略) 転機となったのは 53 年、千葉大学の沼田真との出会いだ。千葉県生物学会の代表であった沼田

は、生物の生活と環境のかかわりを調べる生態学者。浅野は研究を通じて沼田と知り合い、その生態学の「生活型」という視点に示唆を受けた。以降、地下器官の動態、芽ばえの姿など、種によって異なる生活型を追求し、精密な図に表すようになった。

その性格は植物のスケッチにも表れている。例えばキク科のネコノシタなど、花を付けた全形はもちろん、花や果実の様々な形、芽生えの葉の成り方、果実の断面、枝分かれした茎の一本一本、葉の表面の毛まで、細部にわたり観察し、それらを 1 枚の紙にきっちり収めて描いている。

とりわけ他の図鑑の追従を許さないのは、地下部の姿だろう。地表の位置が横線で記され、それより下の根がどういう姿で、どの方向に伸び、これから地上に出る休眠芽がどの位置にあるのかなど、土を掘り起こして観察した様子が手に取るようにわかる。ヤマハッカ、アキカラマツ、ミクリなど、妥協を許さない筆致で描いた根の一本一本の描写は圧巻だ。(中略)

改めて眺めても、その図のすごさには目を見はる。高校教員を定年退職後も私は野外での植物観察を続けているが、ときどき細かい発見をして喜び家に帰ってこの図鑑を開くと、すでに浅野が何十年も前に記録しているのだ。(日本経済新聞 2006 年 1 月 24 日掲載 文・岩瀬徹)

草花遊び図鑑

小林正明／著 小林菜由／絵
定価 1,500 円＋税 AB 判 116 頁



お父さん・お母さんと、おじいちゃんやおばあちゃんと、先生や保母さんと、野外に出て草花で遊ぶ……そんな場面を想定して作ったオールカラーの図鑑。昔なつかしい草花遊び 100 種類を紹介しました。「作り方」や「遊び方」をわかりやすく図解し、植物の写真や解説も掲載して、植物に詳しくない大人でも使いこなせるように配慮しました。

書評から (抜粋)

小林正明さんは「草花遊びを原体験に、成長してから自然界全体を体系的に学ぶきっかけになれば」と期待している。シロツメクサで作る花輪や大きなフキの葉を使ったひしゃくなど、約 100 種類の遊びをイラストと写真で紹介。併せて、使う草花の特徴も解説している。「何が毒なのかも知ってほしい」と、アサガオやアジサイなど身近な 69 種類を取り上げた「気をつけたい植物」も載せている。小林さんは飯田女子短大で幼稚園教諭や保育士を目指す学生向けの授業で「子どもと一緒に自然に触れてほしい」と、草花遊びなどを教えている。

淡いタッチのイラストは、短大の教え子で幼稚園教諭

の小林菜由さんが水彩絵の具で描いた。「どうやって作って遊ぶかを分かりやすいように心がけた」といい、「図鑑を参考に、自分も子どもたちと遊んでいきたい」と完成を喜ぶ。(信濃毎日新聞 2008 年 7 月 17 日掲載)

ささ舟、オオバコの綱引き、ヨシの笛、どんぐりのやじろべえ…団塊より上の世代にとっては、昔やったなつかしい遊びばかりだが、今の子どもはこういう遊びをしない。塾やゲームで忙しいからだろうし、大人が教えなかったせいでもあるだろう。

こういう体験をしない子どもが大人になるときに、自然保護などといわれても絵に描いた餅だろう。体験からくる実感が大切なのだ。

今こそ、すこし暇ができたニューシルバーの出番だ。孫や近所の子どもたちを部屋の外に連れだそう。そしてそういう遊びを知っていることを大いに自慢しよう。いいコミュニケーションにもなるはずだ。

(週刊朝日 2008 年 8 月 8 日掲載)

身近な草花を使った様々な遊び方を紹介した本。夏なら、アサガオの花を使った色水で布を染めたり、フキの葉に穴を開けてお面を作ったり。「フキはやや湿ったところを好む」などと植物の解説もあり、夏休みの自然体験にぴったりの 1 冊だ。毒のある植物とその症状の一覧表も役立つ。(読売新聞 2008 年 7 月 31 日夕刊掲載)

【絵本のコーナー】
子どもたちが先生方やお母さん、おじいちゃんといっしょに絵本感覚で楽しめる、イラストを中心にしたコーナーです。

イタドリ

イタドリの葉は、あまのこむぎでできる毒物です。この毒をたたくと、肉を溶かすのに大変な力が必要で、危険な遊びです。イタドリは、お花が咲くまで、葉が乾いてから使えます。

イタドリの葉は、あまのこむぎでできる毒物です。この毒をたたくと、肉を溶かすのに大変な力が必要で、危険な遊びです。イタドリは、お花が咲くまで、葉が乾いてから使えます。

1 イタドリの葉を、お花が咲くまで、乾燥させます。

2 乾燥させた葉を、お花が咲くまで、乾燥させます。

3 イタドリの葉を、お花が咲くまで、乾燥させます。

4 イタドリの葉を、お花が咲くまで、乾燥させます。

【大人向けのコーナー】
植物そのものの情報を大人向けに提供。野外で植物を見分けるときなどに役に立ちます。

【作りかた・遊びかたのコーナー】
「作りかた」や「遊びかた」をわかりやすく順を追ってイラストで解説。

【大人向けのコーナー】
関連情報をコラムのかたちで掲載。子どもに伝える材料を提供します。

全農教・日本帰化植物友の会会則

1. 本会は全農教・日本帰化植物友の会と称する。
2. 本会は日本の帰化植物に関する研究の知見、情報の交換を行い、あわせて会員相互の親睦を深めることを目的とする。
3. 本会の事務局は全国農村教育協会内に置く。
4. 本会は日本の帰化植物の研究並びに普及に関係する者、日本の帰化植物に関心をもつ者、並びに本会の趣旨に賛同する者をもって組織する。
5. 本会に入会を希望する者は、全農教・日本帰化植物友の会事務局宛に氏名、住所、職業、電話、FAX、e-メールなどを記入した入会申込書を友の会事務局宛に提出する。
6. 本会の会費は、当分の間無料とする。但し、情報活動が活発になった場合は、郵送料などの実費を会費として定める。
(会費の必要が生じた場合は、会員に許諾の通知をする。)
7. 本会は会の目的を達成するため次のような活動を行う。
帰化植物に関する情報の交換
イ) 地域における帰化植物の発生状況
ロ) 帰化植物の生物的特性に関する情報
ハ) 名前、利用、害など植物文化的情報
ニ) 他の情報源の紹介
ホ) 帰化植物の同定に関する質問
会員は以上のような情報を友の会事務局宛に、手紙、FAX、e-メールなどで提供する。事務局はこれらの情報をまとめて帰化植物通信を作成し、会員に配布する。

(附 則)

本会則は平成 14 年 4 月 1 日より施行する。

■ 事務局だより

● 友の会通信の発行が遅れて申し訳ありませんでした。No. 5 を発行したのが 2005 年 10 月 23 日ですから 3 年間の空白がありました。毎年気にはなっておりましたが、事務局の都合により遅れてしまいました。これからはできるだけ定期に刊行できるように体制を建てなおすつもりであります。

● 桑原義晴日本イネ科植物図譜・特別領布

6 頁に紹介し、内容見本を同封した「桑原義晴日本イネ科植物図譜」を本会会員に限り特別価格で領布いたします。

定価 7,140 円(税込み)を本会会員には、特別価格 6,000 円(税・送料込み)で領布します。

なお、この特別価格は書店を通じての注文は適用されませんので、必ず全国農村教育協会に直接注文して下さい。注文は必ず会員番号を明記して下さい。

● 浅野貞夫日本植物生態図鑑・特別領布

9 頁に紹介した「浅野貞夫日本植物生態図鑑」を本会会員に限り、定価 13,650 円(税込み)を特別価格 12,000 円(税・送料込み)で領布します。

なお、この特別価格は書店を通じての注文は適用されませんので、必ず全国農村教育協会に直接注文して下さい。注文は必ず会員番号を明記して下さい。

● 友の会会員の特典について

日本帰化植物友の会の会員の方には、全国農村教育協会発行の図書については、本体価格の 1 割引でお送りいたします。全国農村教育協会の図書でご希望のものがございましたら、FAX または郵送で注文して下さい(会

員番号は宛名シールの下に記入してあります。)

※なお、この特典は書店を通じての注文には適用されませんので、必ず直接申し込んで下さい(送料はかかりません。代金は請求書、振替用紙を同封しますから、現品到着後にお支払い下さい。)

● 中国雑草原色図鑑・特別領布

好評をいただいている「中国(中華人民共和国)雑草原色図鑑」本体価格 22,000 円+消費税を、本会会員に限り消費税・送料込みで 12,000 円で領布しております。残部がまだわずかありますので、ご希望の方はお申込み下さい。なお、この特別価格は書店を通じての注文は適用されませんので、必ず全国農村教育協会に直接注文して下さい。注文は必ず会員番号を明記して下さい。また、本書は中国大陸に生育する雑草約 800 余種を収録し、1 種類数点の写真を使用、中国語、日本語、英語で解説し、生態、形態の説明の他、用途として漢方薬としての記載もあり、中国の雑草を知ることができる唯一の図鑑で、オールカラー、A4 判 430 頁の図鑑です。

全農教・日本帰化植物友の会事務局

〒110-0016 東京都台東区台東 1-26-6
(植調会館)全国農村教育協会内

TEL 03-3833-1821 FAX 03-3833-1665
営業 TEL 03-3839-9160 FAX 03-3839-9172

http://www.zennokyo.co.jp
e-mail: kika@zennokyo.co.jp